知識を得ると生きることが楽しくなる

澤田 裕之（国際学院埼玉短期大学）

幸　せ　の　教　室

（原題：Larry Crowne）

©2011 Universal Studios

- 種別：Blu-ray Disc ／DVD（映画）
- 監督：トム・ハンクス
- 製作年：2011 年
- 製作国：アメリカ合衆国
- 発売元：ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン
- 価格：ブルーレイディスク 2,500 円（税込）
- 時間：本編 98 分
- 音声：英語／日本語
- 字幕：英語／日本語／日本語吹替用

あらすじ

ラリー・クラウンは高校卒業後、20 年間の従軍（海軍）を経て、スーパーの店員として働いていた。仕事が好きでいつも楽しんでいたラリーであるが、ある日、長年勤務してきたスーパーをリストラされてしまう。理由は、ラリーが大学を出ていないという「学歴」であった。貯金もなく途方に暮れるラリー。しかし隣近所に住む友人ラマーから「知識は武器になる、教育だ」（Get some knowledge and you'll be fireproof!）という言葉を受け、再就職のためのスキルアップを図るべくコミュニティ・カレッジに入学する。ラリーは初めてのキャンパスで年齢も境遇も違う様々な人々と出会い、学び、全てが新鮮で充実した毎日を過ごし始める。一方、ラリーが履修したスピーチ・クラスを担当する講師メルセデスは、自分の講義は誰の役立たないという無力感から、仕事への情熱を見失っていた。ラリーとの交流がきっかけとなり、自分と向き合い始めるメルセデス…。そんな二人の出会いが、お互いの人生を大きく変えていく。

シーン再現

＜メルセデスが担当するクラス「スピーチ 217」でのラリーのプレゼンテーション＞

ラリー： 海軍で地理も学んだ…。でも、この講義に参加していなかったら、こんなに容易に経験談を話せるようにはなれなかった。ジョージ・バーナード・ショー※の格言にある。「愚か者の脳みそは哲学を愚行へ、科学を俗説へ、芸術を衒学へと要約する。ゆえに大学教育がある」。きっと、ショーは大学で学んだのだろう。きっと「スピーチ 217」のような“非公式の意見術”みたいな講義で…。

※ ジョージ・バーナード・ショー(George Bernard Shaw, 1856-1950)：アイルランド出身。劇作家として数多くの戯曲を残し、1925 年にノーベル文学賞を受賞している。

教育学の視点から

何故、教育が必要なのか…。この問いについての答えは、立場や見方によって様々であり一様ではない。本映画の主人公であるラリーの場合、学歴がないという理由で職場を解雇され、再就職のために教育を受ける。ラリーは、自分を守るために、そして、生きてゆくために教育を必要としたのである。

この映画は、教育を行う側である教員についても、メルセデスを通じて描いている。メルセデスのクラスは開講条件ぎりぎりの 10 人と受講生も少なく、一見すると不人気の講義であり、本人もやる気を失っていた。メルセデスにとって講義は単なる仕事であって、楽しさや生きがいとは無縁のものであったのである。しかし、再就職のため（生きるため）の教育を得ようと必死に努力するラリーと出会い、徐々に自らの講義に楽しみを見出していく。メルセデスは、自分の講義がラリーという一人の人間の生き方に寄与していることを実感したのだろう。

ラリーとメルセデスの立場は異なるが、学校という場を通じて、それぞれ新たな生き方を掴んでゆく様子には共通するものがある。自分自身の誤った考え方に気づかされ、それを上書きするような新しい知見を得ることができたときの歓びは、筆舌しがたいものがある。学校教育は、このような経験を通して知識を得るためにこそあり、学校が存在するのである。それは映画の中で引用されたバーナード・ショーの格言にも通じる（シーン再現）。ここで筆者は、法学者チェーザレ・ベッカリーア（Cesare Beccaria, 1738-1794）の「知識から生ずる害悪は、知識が普及していくにつれてだんだんと減少し、逆に知識から生ずる利益はだんだんと増えていく」という言葉を想起した。ラリーは知識を獲得し、その知識という武器を生かして自らの人生を切り拓いていったのである。

しかし、日々教育を巡る様々な問題が取り沙汰される中において、果たして学校はそのような歓びを得る場所となっているだろうか。「何故、勉強するのか？」、「何故、知識を得なければならないのか？」という問いに、学校教育は答えることができているだろうか。

この映画のキャッチコピーは、「そこは、明日が好きになれる場所」である。作品中では、試練を受けても立ち直ることができる、最悪の状況が新たな始まりになる、そして、生きていることが楽しくなる場としてコミュニティ・カレッジの生活が描かれている。より教育に引き付けて、バーナード・ショーやチェーザレ・ベッカリーアの主張から考えてみたとき、これらの場所は、「昨日よりも新しい知識や自信を持つことができる場所」と言えるだろう。そして、そのために、教育が必要なのである。

何故、教育が必要なのか…。本作品は、この問いに対して「知識を得て、より楽しく生きるため」という答えを提示すると同時に、観る者に生きる希望を与えてくれる。

「知識は武器になる、教育だ！」

Information

【引用参考文献】

- チェーザレ・ベッカリーア、小谷眞男訳『犯罪と刑罰』、東京大学出版会、2011 年、p.145
- Bernard Shaw, *Man and Superman,* Constable and Company Ltd., London, 1912, p.230